益田市版保幼こ小接続カリキュラムを活用した幼小接続に関する一考察（Ⅱ）

Research on the connection between early childhood education and elementary school education using Masuda City's version of "Curriculum for the Connection between Early Childhood Education and Elementary School Education."（Ⅱ）

高　橋　泰　道　・　矢　島　毅　昌
（保育教育学科）

キーワード：保幼こ小接続（幼小接続），スタートカリキュラム，交流活動

1. はじめに

本稿は，令和５年度島根県益田市と島根県立大学との共同研究事業「益田市版保幼こ小接続カリキュラムを活用した幼小接続の取り組み　３年次」（研究代表者：高橋泰道）の一環として，益田市が今年度取り組んできたスタートカリキュラム，及び交流活動等について考察するものである。

本研究では，子どもの発達や学びの連続性を保障するための幼児期の教育と小学校教育との円滑な連携・接続のために取り組んだ，益田市内 15 小学校区における幼児期５歳児後半から児童期第１学年１学期までの幼児教育と小学校教育の接続期におけるスタートカリキュラムの取り組みと，年長児と小学１年生との交流活動の取り組みについての１年担任への調査結果を基に，幼児期の教育と小学校教育との円滑な連携・接続（以下，「幼小接続[1]」と記す。）についての望ましいあり方について考察することを目的とし，今年度で３年次を迎えた。これまでの研究内容については，高橋・矢島（2023）（2022）を参考にされたい。

2. 今年度の幼小接続の取り組みの概要

（1）目的・効果

本年度の目的は，「幼児教育施設と小学校が連携・協同し，この時期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図る」ことであり，以下のような

[1] 「幼小接続」とは，幼稚園と小学校の接続のみではなく，幼稚園・保育所・認定こども園が行う幼児期の教育と小学校教育の接続を指している。

効果を期待している。

1．各小学校区の教育のつながりを意識した活動が，子どもの豊かな体験を生み出し，主体的・対話的で深い学びを目指すことができる。 2．幼児教育施設，小学校の教職員が，県立大学からの専門的な支援を受けることができ，保幼こ小も接続期の教育の質的向上を目指すことができる。

（2）取り組みの内容

今年度の主な取り組みとして，以下の内容が予定された。

①幼小接続のよりよい実践を目指した取り組み ・各小学校区における教職員相互の合同研修の実施 ・保育参観・授業参観の推進 ②交流活動の実践における検証・改善 ・小学校区ごとの振り返りをもとにした計画 ③幼小接続の充実を目指した行政の関わり方 ・研修の実施方法や内容についての振り返り ・架け橋プログラムの作成

（3）年間スケジュール

5月　幼小接続についての理解促進研修会の実施（保幼こ小各校園長参加）今年度の交流活動・校区内研修の計画の把握 6～7月　各小学校のスタートカリキュラムの様子を視察 7～11月　各地区の幼小（特に年長児と小学校1年生）交流活動の様子を観察，面接調査，内容分析 8～9月　各地区の交流活動及びスタートカリキュラムの実施経過の把握（質問紙調査），架け橋プログラムの作成 8月～　各小学校区での教職員研修会の様子の観察，助言，検証 10月　モデル地区での交流活動を基にした研修会の実施 1月　各小学校区の交流活動実施状況の把握と検証 2月　今年度の成果報告と幼小接続についての理解促進研修会の実施 小学校区ごとの振り返りをもとにした次年度の計画作成，助言

3.スタートカリキュラム及び交流活動についての調査の対象と方法，内容

（1）調査の対象と方法

1学期間のスタートカリキュラムの取り組みを通して，小学校へ入学した1年生にどのような姿が見られ，幼児期の教育と小学校教育との円滑な連携・接続を目指す上で，どのような成果が見られたのかについて，また，小学校1年生と年長児との交流活動等の成果と課題について，市内の小学校15校の

1年生担任19名に質問紙法で調査を行った。調査の実施期間は，2023年8月である。また，交流活動については，現地視察を行った。調査の実施期間は，2023年10月である。

調査結果は，研究倫理に則り，教育委員会を通して各校の承諾を得て使用した。また，研究目的以外で使用しないこと，個人が明らかにならないよう配慮することを各校へ説明した上でデータを処理した。また，データの使用については，被検者が希望しない場合には研究対象外とすることにも留意した。

（2）調査内容

調査内容は，以下の通りである。

・益田市版保幼こ小接続カリキュラムの活用状況
・幼小接続が円滑に行われているかについて
・スタートカリキュラムを行う上での工夫や今後の課題
・幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿
・保幼こ小交流活動の年間の回数，交流活動の様子
・保幼こ小接続の取り組みについての全校での理解
・保幼こ小接続の取り組みの必要性　　等

（3）分析方法

集計した結果について，項目毎に件数と割合を算出し，経年比較を行った。また，自由記述に関しては，UserLocalＡＩテキストマイニングツール(https://textmining.userlocal.jp/)で分析し，結果には表出された文の重要度を示す「文章要約」を用いた。

以下，紙面の都合により，その結果を抜粋して，昨年度までと比較しながら，その成果と課題を考察する。

4.スタートカリキュラムと交流活動についての調査結果と考察

（1）幼小接続が円滑に行われているか

幼小接続が円滑に行われているかについての結果は，図1の通りである。

保幼こ小接続は，「そう思う」「大体そう思う」を併せて94%であり，昨年度の100%には至っていないが，概ね円滑に行われていることが窺われる。

その理由としては，「益田市版保小こ小接続プログラム」を有効に活用するだけでなく，以下のように「保育園との情報交換を密に行っていること」「保育園での活動を取り入れる」「遊びを学習に取り入れる」など，幼児期での学びを小学校教員が把握し，幼児期の総合的な学びを生かし，進んで自分らしさを表出し，自分のもっている力を働かせ，学校生活に馴染み，意欲的に学校生活や学習に取り組むことができる環境を作っている点が挙げられる。

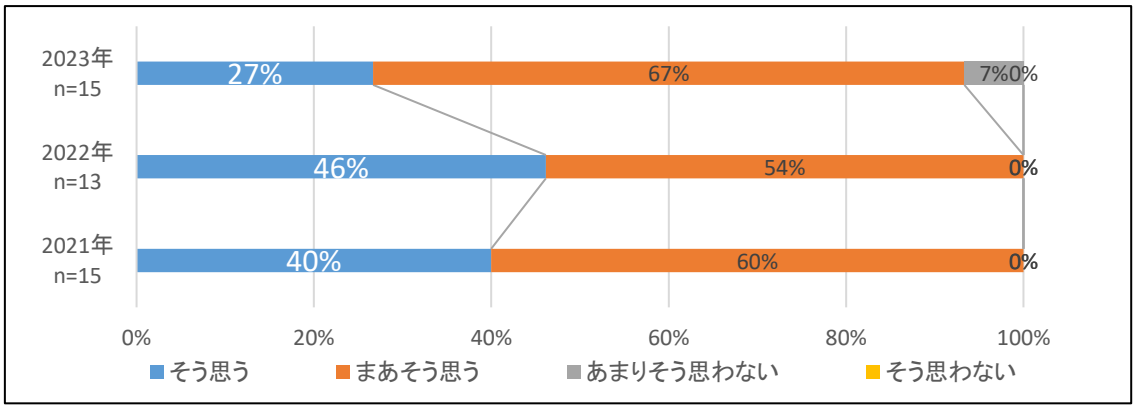

図１　幼小接続が円滑に行われているかについて

・保育園との情報交換を生かし，１年生がスムーズに学校生活に慣れている。
・活動を 2～3 つに分けて取り組むことで集中でき，保育園での活動を取り入れることで学校のサイクルに慣れている。
・新 1 年生は安心して登校し，遊びを学習に取り入れることで移行がスムーズ。学校の雰囲気を知っている子どもたちは早く適応している。
・授業時間を工夫し，学習公開後の情報交換や交流会を実施している。

また，スタートカリキュラムから現れた具体的な子どもの姿としては，以下のような姿が挙げられていた。

・学習や生活に必要な習慣や技能が身につき，1 日の流れや順序が理解できるようになる
・朝の活動の流れがゆっくりでき，学校に慣れる時間がある
・2 年生の姿を見て，小学生としての生活や学習がイメージしやすくなる
・保小交流を通じて新入生が安心して登校する様子が見られる
・時間にゆとりを持つことで新しい保育所同士の人との関わりが生まれる
・学校生活に前向きに取り組む姿勢が見られ，交流の場を設けることで関係作りがスムーズになる
・45 分の授業に徐々に慣れてくる様子が見られる
・登校を渋る姿が見られず，少しずつ学校生活に慣れていく姿が見られる
・時間を意識し，約束事を守ろうとする姿が見られる

(2) スタートカリキュラムにおける工夫について

上記のようなスタートカリキュラムによる具体的な子どもの姿を表出させた取り組みの工夫として，昨年度は調査結果から以下の６つの内容に集約した。

① 生活の見通し・適応指導の工夫

② モジュール・時間割設定・ゆとりの時間の設定
③ 学習活動の工夫
④ 合科的，関連的学習の取り組み
⑤ 人間関係づくり

今年度はさらに具体化して，以下の 10 項目について調査した。結果は図 2 の通りである。

（ア） モジュール方式など時間配分を工夫した。
（イ） なかよしタイム，ニコニコタイムなどを設けた時間割を工夫した。
（ウ） 遊びや活動性のある活動を取り入れた。
（エ） 生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図った。
（オ） 安心して学べるように学習環境を工夫した。
（カ） 入学当初は特別な時間割を編成した。
（キ） 入学当初は週案を作成した。
（ク） 入学当初は，生活上必要な習慣や技能が身に付く時間を増やした。
（ケ） 入学当初は，学習・生活の見通しをもたせる指導を行った。
（コ） 幼児期の学びを生かした学習活動の工夫をした。

①生活の見通し・適応指導の工夫では，「(ク)入学当初は，生活上必要な習慣や技能が身に付く時間を増やした」において，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 100%。「(ケ)入学当初は，学習・生活の見通しをもたせる指導を行った」についても「そう思う」「まあそう思う」の合計が 100%であり，また，「(オ)安心して学べるように学習環境を工夫した」が，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 95%であることから，当然のことながら新しい環境へ

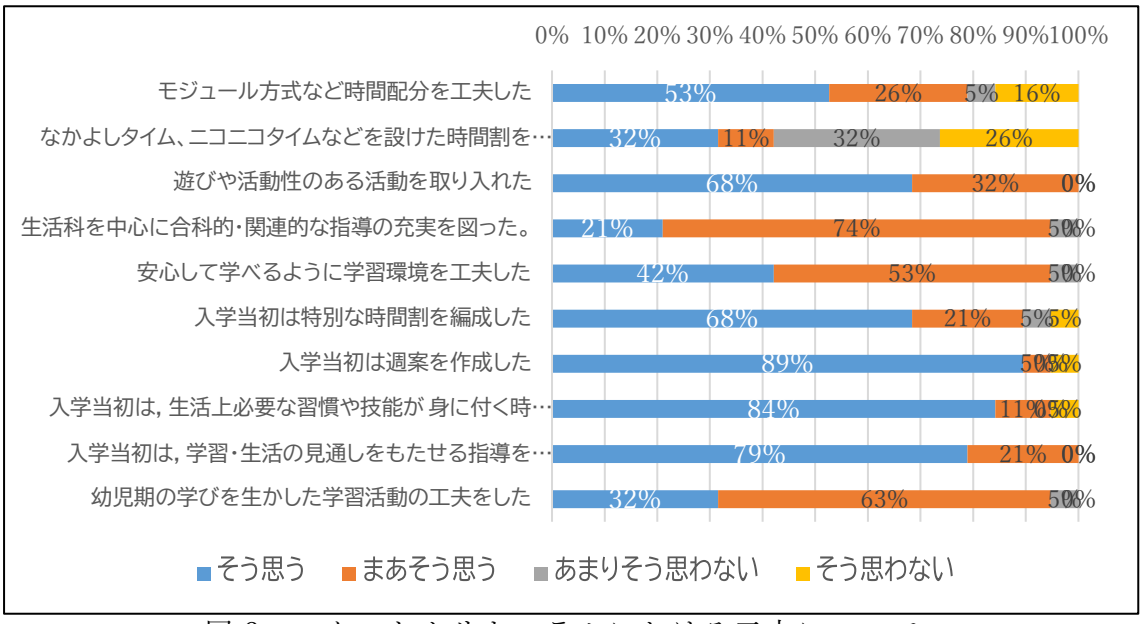

図 2　スタートカリキュラムにおける工夫について

の適応指導や学習環境づくりが工夫されていることが窺われる。

②モジュール・時間割設定・ゆとりの時間の設定では，「(ア)モジュール方式など時間配分を工夫した」について，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 79%であり，4 月は 45 分間を 15 分間ずつに区切って授業を行うなどの工夫が見られることが分かった。また，「(キ)入学当初は週案を作成した」についてが「そう思う」「まあそう思う」の合計が 95%と高く，「(カ)入学当初は特別な時間割を編成した」についても「そう思う」「まあそう思う」の合計が 89%と高く，入学当初は新入生を意識したカリキュラム編成を行っていることが窺われる。しかし，「(イ)なかよしタイム，ニコニコタイムなどを設けた時間割を工夫した」については，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 43%と低く，「なかよしタイム」「ニコニコタイム」などの特定な時間を設定する学校は少なく，「(エ)生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図った」の「そう思う」「まあそう思う」の合計が 95%ということから，生活科を中心にして合科的・関連的な時間割編成が行われていることが窺われる。

③学習活動の工夫では，「(ウ)遊びや活動性のある活動を取り入れた」について，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 100%，「(オ)安心して学べるように学習環境を工夫した」が，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 95%，「(コ)幼児期の学びを生かした学習活動の工夫をした」が「そう思う」「まあそう思う」の合計が 95%であり，幼児期の学びやその連続性を生かした活動的な学習活動を取り入れていることが窺われる。しかし，別途調査した「これまでに生活科等の学習指導案を作成する時に，児童観等に子どもたちの幼児期の実態を記入している」については，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 5%と非常に低く，1 年生 1 年間を通して，幼児期からの学びの連続性について意識されていないことが窺われる。

④合科的，関連的学習の取り組みについては，「(エ)生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図った」について，「そう思う」「まあそう思う」の合計が 95%ということから，生活科を中心にして合科的・関連的な指導が行われていることが窺われる。

⑤人間関係づくりでは，「なかよしタイムを設け，安心できる場づくり・友だち関係作りに努めた」「じゃんけんゲームなど友達どうしが仲良くなれる活動を意識して取り入れた」等の工夫が見られた。

(4) 1 学期に発揮された幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿

幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿の内のどの姿が 1 学期中に多く発揮されていたかについては，図 3 の通りである。

昨年度に比べて，どの姿も表出していることから，幼児期での学びが小学校に入学後に発揮されており，学びの連続性が表れていることが窺われる。

この大きな違いは，子ども自身にあるのではなく，昨年度は 1 年生担任の幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿についての捉え方が十分ではなく，見取ることができなかったが，保幼こ小連絡協議会の研修会を毎年行っていく中で，小学校教員の 10 の姿についての理解が深まってきたため，今年度は子どもたちの姿を 10 の姿から見取ることができたために増えたのではないかと考える。

これについては，次年度も引き続き調査し，仮説を検証していきたい。

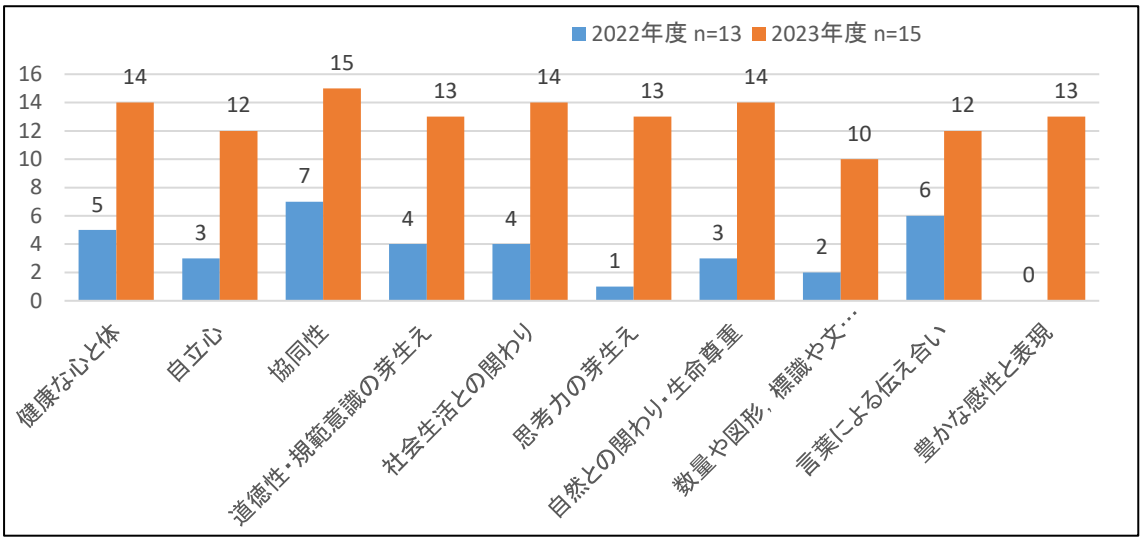

図 3　1 学期に発揮された幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿

なお，10 の姿が発揮されている中でも，「数量や図形，標識や文字などへの関心・態度」については，15 校中 10 校と他より少ない。幼児期における数量や図形，標識や文字などへの関心が高まるための更なる環境構成の工夫が必要ではないかと考える。

（5）スタートカリキュラムについての今後の課題

今回のスタートカリキュラムの取り組みを通して，表 1 のような今後のスタートカリキュラムに向けての課題が見られた。

表 1　スタートカリキュラムについての今後の課題

カリキュラムの作成	・子どもの実態に応じたカリキュラムの必要性 ・スタートカリキュラムの適切な見える化
人間関係・友達との交流	・友達との関わりや集団遊びの機会の確保 ・子どもの友達思いを育む方法の検討
個別対応と工夫	・少人数環境での個々の子どもへの対応の工夫 ・子どもたちの学習へのハードルを下げる工夫
教員間の連携	・スタートカリキュラムに関する教員間の情報共有と連携強化 ・他校との意見交流の場の提供
時間配分とバランス	・スタートカリキュラムと学習内容のバランスの調整 ・時間配分の適切な調整
学習環境の適応	・幼稚園や保育所から小学校への環境の違いに対する子どもの適応の支援

年々，児童の実態が多様化し，保育園の取り組みも園によって異なっている上，多くの園から入学してくる小学校ではその対応がより多様になってくると考えられる。今後は，益田市全体での共通した教育方針の確認，共有化の基に，一人一人の多様性や 0～18 歳の学びの連続性に配慮しつつ，教育の内容や方法を工夫すると言った学校独自のカリキュラムの見直しが必要であると考える。その際に，子ども実態を踏まえ，人間関係づくりや個別対応，学習環境への対応の工夫などが必要になってくると考える。また，保育園や幼稚園，及び家庭との連携を深めると共に，教員間での情報共有と連携を強化していく必要があると考える。

5. 交流活動の成果と課題

（1）交流活動の年間回数

図 4 は，2020 年度から今年度まで 4 年間の各小学校区での交流活動の年間回数の変化を示したものである。

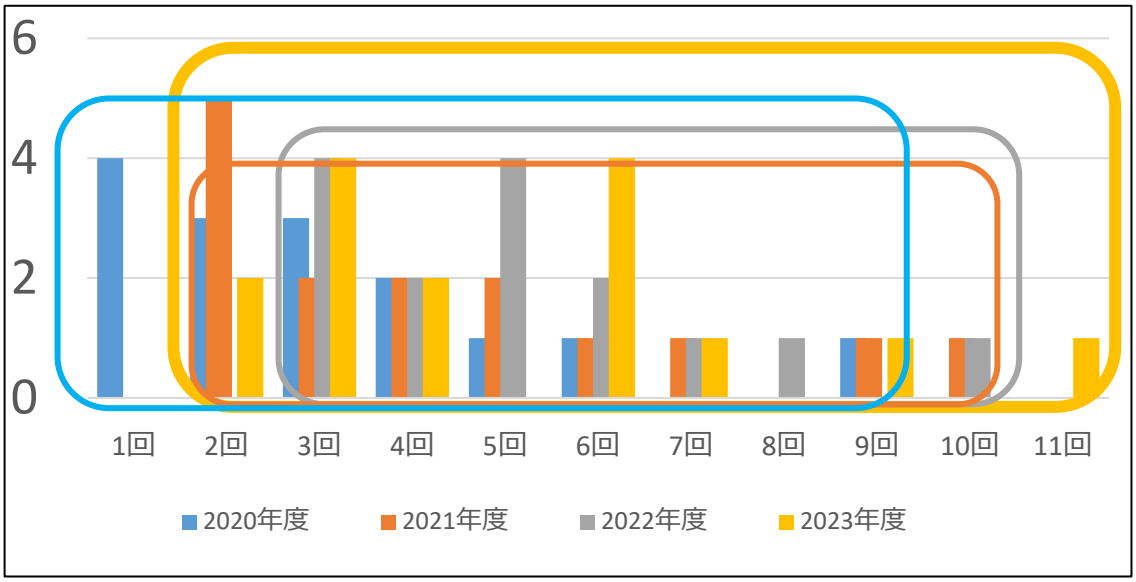

図 4　各小学校区の交流活動の年間回数の変化

新型コロナウイルス感染症の 5 類への移行により，各小学校区の交流活動の年間の実施回数が増えている。その原因としては，昨年度と同様に益田市保幼こ小連絡協議会の年複数回の研修会によって幼小接続の必要性の理解が次第に浸透しており，幼小接続に係る行事も大切な行事という意識がもたれ，年間計画にキチンと位置づいてきたことが挙げられると考察される。このことは，幼小接続の必要性についての小学校への調査においても，「そう思う（58%）」「まあそう思う（42%）」と全ての学校で，その必要性を感じていることからも窺われる。

（2）交流活動の内容について

交流活動の取り組みについては，昨年度の実践を基に高橋・矢島（2023）により，以下のように整理した。

・年間で同じペアで繰り返し交流活動を行う（年間４回くらいが望ましい）ことにより，年長児の小学校への期待感，安心感が高まるとともに，１年生にとっては，幼児期での総合的な学びの活用・発揮しながら，目的意識をもって子ども自身が作る交流活動が展開されることも期待される。 ・その中で，１年生にとっては，リーダーとしての責任感や自覚，主体性，協働性，自信など様々な成長が見られるようになるのではと考える。そして，それを支える教師や保育者が，子どもたちを見取り，綿密な打合せをし，相互理解を図っていく中で，より円滑な幼小接続が進んでいくと考える。

このような年間４回程度の定期的な交流活動の形に加え，今年度の交流活動の視察では，これまでとは異なる同じテーマ（川で遊ぼう）で数ヶ月連続して継続的に行うテーマ型の交流活動も見られた。活動の流れとしては，①近くの川でみんなで遊ぶ→②川で遊んだ思い出を基に，みんなの川を模造紙をつなげて作る→③川の生き物を作り，みんなの川に飾る→ぼくたち・わたしたちの川を紹介する。と言った内容で４回継続して行われていた。

この連続した交流活動の良さとしては，子供たちが同じテーマで継続的に取り組むことにより，子供たちの興味・関心が高まり，自らの探究心を高めていくことができると考える。活動の中では，年長児が自分の思い･願いを実現するために，１年生の活動の工夫の様子を真似したり，手伝ってもらったりして，安心感を持って自己実現をしていく姿が見られた。１年生にとっては，自分の思い・願いを実現していく中で，年長児に教えたり，助け合ったりすることで，主体性や協働性が培われていく姿が見られた。

この小学校区では，保育園と小学校が隣接しており，頻繁に交流が行われている。そのような前提に立つと，このようなテーマ型の交流活動も実現可能になると考える。

6.おわりに

本稿では，益田市内の小学校区における幼小接続の３年間の取り組みを踏まえて，特にスタートカリキュラムと交流活動を取り上げ，幼小接続の在り方について考察を行った。

今年度は，特に益田市保幼こ小連絡協議会の研修会の回数を増やし，年度当初に１回目を行い，例年に比べ，スタートカリキュラムのあり方を見直し

たり，１年間の見通しをもったりすることができたと考える。また，２回目の研修会では，２つの交流活動を見学し，それぞれの交流活動を振り返り，それぞれの良さや課題を見出し，改めて交流活動のあり方を見直すことができたと考える。

「スタートカリキュラム」は，これまでの小１プロブレム解消のための単なる小学校生活への適応指導と言った考え方ではなく，子どもたちが幼児期の活動の良さを生かして，安心して学校生活をスタートすることを目指し，さらにはいきいきと学びに向かう子どもの育成を目指しており，円滑な幼小連携・接続のための価値ある取り組みであるといった共通理解も持つことができたと考える。今後は，子どもたちの成長の姿を長期的に捉え，幼小接続の効果を可視化し，さらに各小学校区内での教職員で共有していく必要があると考える。

今後，幼保小の架け橋プログラムの実施に向けては，現在ある「益田市版保幼こ小接続カリキュラム」を架け橋期である２年間に具体的に落としていく作業を各小学校区で行っていくなど，更なる取り組みを期待したい。

【謝辞】

本研究は，令和５年度益田市と島根県立大学の共同研究事業「益田市版保幼こ小接続カリキュラムを活用した幼小接続の取り組み（3 年次）」（研究代表者：高橋泰道）の一環として実施した研究の成果の一部である。本研究にご協力いただいた益田市・益田市教育委員会・島根県立大学教育連携協議会の皆さま，並びに益田市保幼こ小連絡協議会関係教職員の皆さまに感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

・汐見稔幸・無藤 隆(2018)「<平成 30 年施行>保育所保育指針･幼稚園教育要領幼保連携型認定こども園教育･保育要領解説とポイント」.ミネルヴァ書房
・高橋泰道（2020）「保幼小連携・接続の在り方に関する一考察-保小交流活動を通して-」.人間と文化.3.124-134
・高橋泰道・矢島毅昌（2022）「スタートカリキュラムを活用した幼小接続の取り組みに関する一考察」.人間と文化,5,87-97
・高橋泰道・矢島毅昌（2023）「益田市版保幼こ小接続カリキュラムを活用した幼小接続に関する一考察」人間と文化，6,28-38
・中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会（2022）「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」
https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf
・内閣府･文部科学省･厚生労働省(2017)「平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所

保育指針 幼保連携型認定こども園教育･保育要領 原本｣チャイルド本社
・益田市（2017)「益田市版保幼こ小接続カリキュラム」
・幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議(2010)幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2011/11/22/129895511.pdf